

芭蕉元禄事業 奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民俳句ポスト
平成三十一年三月度 入選句（投稿総数三千九百十三句・一般投句数五百八十九句）
特選 選者 名和 永山

紅蘭女史の刺繍こまやか冬ぬくし

養老郡養老町 田中 紫香

「紅蘭女史」とは、梁川紅蘭のことである。現在の大垣市曾根町に生まれ、江戸時代後期から明治時代初期の女流漢詩人であった。

十七歳の時、三十四歳であった梁川星巖と結婚。星巖の「裁縫をすることと三体詩を暗誦せよ」と言われたことをきっかけに、晩年までに四百以上の漢詩を示した。

さて、掲句を見てみよう。上五を「紅蘭の」といえばよいのだが「紅の蘭」と誤解が生ずる。あえて「紅蘭女史の」と字余りになつても、はつきりと「梁川紅蘭のこと」としたことが、まず評価される。そのことによつて「大垣市の『記念館』」に展示されている「紅蘭の刺繍を思い出させる。その刺繍の丁寧さ、緻密さを「こまやか」と表現し、「冬ぬくし」の季語へつなげているところに「季語」の働きがうかがえる。是非一度、記念館の「刺繍」をご覧ください。

下萌ゆる地を駆ける子に未来あり

大垣市 大杉 すみゑ

「下萌ゆる」は、冬枯れの中に春が立ち、いつの間にか草の芽が萌えつつあることをいう。早春の季語である。人目につきににくいのであるが、その芽もいつしか大きく成長し、緑を深くする。その現象は、実に子どもが成長し、未来への夢を掴む姿にも似ている。「未来あり」によつて子どもも成長する様子を描くことも出来る。また、「駆ける子」の措辞により、動き回る元気な様子から、多義にわたる未来を予測する楽しさも生まれるのである。

空家とふ古き貼り紙桜東風

大垣市 渡辺 智子

何気ない風景の「空き家の貼り紙」であるが、その時の詠者はこんなことを思ったのであろう。

「春がやってきた。この空き家にもしばらくすれば人が住むようになるだろう。春の爽やかな東からの風に乗つて、桜も舞つてきている」と。季語の「桜東風」がこれからの期待と願望をしっかりと価値づけている。

俳句は「季語」の働きによつて、詠者の気持ちも推しはかってくれるのである。季語が十分に生かされた俳句ではないか。

秀逸

米を研ぐ五指ゆるゆると四温かな

福井県敦賀市 山田 美千代

大根干すゆつくり進むもの忘れ

海津市 水谷 勲一

四温晴 一步先へと万歩計

大垣市 高津 喜久子

俳をけふの幸とす薄氷

養老郡養老町 田中 秀草

節分会みそぎ漢をつつむゆげ

大垣市 野村 みち代

ぽつぽつと跳ねる枝先八重紅梅

大垣市 高井 光衣

攻める駒躲す一手や春障子

大垣市 早崎 美弥子

水温むけふは遠出の車椅子

岐阜市 堀江 美州

ホームラン打てる気がする春の原

神奈川県川崎市 佐藤 廣枝

古戦場片手片目の雪だるま

三重県鈴鹿市 松井 政典

入選

戸を軽く叩くでもなく春来る
念仏をとなえて眠る春の夜
村の医院暗き廊下に白き梅
列島を押し流さんと春疾風
ものの芽や転びし稚の指柔し
伊吹嶺に雲の褥や山眠る
雪だるまべそかきながら消えゆけり
母の文繰る指先に春の風
落の薑食めば若草広ごりぬ
木も草も大地の目覚め雪解水

大垣市
大垣市
大垣市
大垣市
大垣市
大垣市
大垣市
岐阜市
岐阜市
大垣市

吉田 てるみ
大塚 たえ
娑婆だ婆婆
棚橋 みさを
傍島 豊子
中村 有紀
新町 恵子
伊藤 瑞実
村瀬 慶祐
大角 信華

入選

抹茶の香残る茶筌やさくら餅
童歌口遊つつ折る雛
乾杯のワイングラスや風光る
おはようと校長の声風光る
鯉尾鰭さつとひと振り春の川
啓蟄や世間知らずのまま句座に
訃の報の続くや春はそこなの
砥部焼に只一輪の寒つばき
ときをりに打ち合ふ絵馬や梅三分
蕉像にまづは一礼初句会

大垣市
不破郡垂井町
福井県敦賀市
大垣市
不破郡垂井町
大垣市
不破郡垂井町
奈良県奈良市
愛知県豊田市
大垣市

早崎 美弥子
高木 初枝
山田 美千代
日比 ジュンコ
西垣 和志
宮脇 和子
清水 るり
岩井 壮介
城山 憲三
片山 洋子

選者吟

三一 一死者の影追ふ波の音

永山